

## 特集1 米沢に咲く、紅花。

# その歩みと人と

米沢市を含む最上川沿いの地域で昔から栽培・加工されてきた紅花。その生み出す美しい赤い色は、長い間、多くの人を魅了してきました。

近代化などの影響で一度は大きく衰退した紅花栽培ですが、戦後少しずつ栽培が再開されます。そして平成31年2月、「歴史と伝統がつなぐ『山形の最上紅花』」日本で唯一、世界でも稀有な紅花生産・染色用加工システム」が日本農業遺産に認定。令和3年10月には、「最上川源流の紅花システム 歴史と伝統がつなぐ山形の『最上紅花』」を世界農業遺産にすべく申請しています。今、紅花は再び盛り上がりを見せているのです。

そこには、紅花に魅了された先人の努力が不可欠であることはもちろん、後世にこの伝統文化をつなぐと奮闘する地域の人々の姿がありました。

◆日本農業遺産とは…独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接にかかわって育まれた文化などが相互に関連して一体となった、日本にとって重要な伝統的農林水産業を営む地域を農林水産大臣が認定するもの。22地域が認定されている（1月現在）。  
◆世界農業遺産とは…日本農業遺産と同様に、伝統的農林水産業を営む地域で、世界的に重要と認められた地域を、国際連合食糧農業機関が認定するもの。日本では13地域が認定されている（7月現在）。

# 紅花を愛した多くの人が 今、米沢に紅花を咲かせています

紅花が米沢の人々に親しまれ、より愛されるようにと願いながら活動している若者がいます。彼らに、紅花の歴史と今、そして活動への思いを聞きました。

## 米沢と紅花

米沢と紅花との関わりは、村山地方における、紅花商人が売買し北前船で交易を行った歴史とは少し異なります。米沢の紅花は、江戸時代には山上地区などで盛んに栽培されていた記録があり、米沢市史によると、栽培された紅花は、米沢藩が買い上げて、上方へ送るといふ手法を取っていたようです。上杉鷹山公が推奨した食の手引書『かてもの』にも紅花は「こうくわ」として登場し、食物としても親しまれていたと考えられます。

着物などの鮮やかな赤を表現できる唯一の染料として重宝された紅花は、金の10倍の価値があるとして、県内ではその加工までが盛んに行われていました。

しかし、産業革命があった明治期に入ると、染めやすく長持ちする化学染料におされ、紅花は赤を表現する唯一の染料ではなくなりました。このことから、京都などにはいる紅花染め職人が減り、紅花栽培が行われなくなり、紅花は、栽培・染

## 主な沿革

- 3世紀頃 日本に紅花が伝来
- 室町時代末期 山形に紅花が伝来
- 慶長6年～(1601年) 直江兼統が米沢に入部。藩が紅花の買上を実施。商品として京都や大阪に送る。
- 明治時代～戦時下 最上紅花が衰退
- 昭和40年 現(株)新田が紅花染めの「紅花紬」を発表。山形県紅花生産組合連合会が組織され、生産の再興が本格化。
- 昭和57年 紅花が「県の花」に制定
- 平成31年 日本農業遺産認定

めの技術共に途絶えてしまいました。

昭和26年になると、市内中学校の理科教師・鈴木孝男さんが、独自に紅花染めの研究・紅花栽培を始めました。このことは後に、紅花栽培復活と、米沢で初めて紅花染めを行う契機となります。鈴木さんに賛同した(株)箴園と(株)新田(会社名は現在のもの)は、米沢産紅花での紅花染めとその商品化に尽力しました。県全体としても昭和40年代に紅花は再び盛り上がりを見せ、昭和57年に県花に制定されました。

## 今、紅花は

平成31年2月、山形県最上川流域(本市を含む4市4町)の紅花生産と紅餅の加工システムが日本農業遺産に登録されました。これは、紅花を生産し加工するシステムを伝統的に行ってきたことが評価されたものです。現在、世界農業遺産に申請中で、審査結果を待っています。世界農業遺産の登録は発展的登録と言い、さらに厳しい基準で、伝統のみならず継続的に発展させることが求められます。

紅花の生育には、最上川沿いの朝霧が良く、また、とげを柔らかくし摘みやすくするそうです。その源流がある本市を含んで農業遺産に登録されることは大変誇らしいことです。ぜひ地域の皆さんにも、米沢の紅花の素晴らしさを知ってもらいたいです。市は、今年度から「紅花プロジェクト」に取り組んでいます。先人の努力を無駄にせず、未来の米沢を生きたる人も誇れるよう、伝統をつないでいきたいです。

## おもしろな地域おこし協力隊 紅花プロジェクト専門員 ことこの キルナー 琴乃スウ

東京都世田谷区出身。イギリス人の父と山形市出身の母の間に生まれる。郊外で暮らすことを望み、山形県に移住を決意。編み物が得意で、繊維に関して何かできることがあるのではと考え、おもしろな地域おこし協力隊「紅花プロジェクト専門員」に応募。現在、紅花の魅力を発信している。



この方に  
聞きました



- ① 摘んだばかりの紅花
- ② 花びらを乾燥させたもの(乱花)
- ③ 紅花加工の様子
- ④ 九里学園高校の齋藤千紘さんが(株)銘菓の錦屋と共同開発したべにばな琥珀糖
- ⑤ 米沢工業高校専攻科では紅花の色素などを抽出して真空・冷凍保存している
- ⑥ (株)新田に飾られている鮮やかな紅花ドライフラワー



地域の方皆さんにも、紅花の歴史を改めて知ってもらい、ぜひご家庭でも紅花を植えてほしいです。私も今後も紅花の魅力発信を続けていきたいです。また、後輩にも研究を引き継いでおり、また新たな方法で発信してほしいと考えています。

紅花を選んだ理由は、伝統工芸品に関心があったことと、中学生の時に体験した紅花染めが忘れられず、この経験を活かしたかったからです。商品開発をするまでは大変でしたが、高校生のうちに社会の学びを得られたことは貴重な経験です。また、あらゆる過程を経て、紅花が県の特産物になったことが素晴らしいと感じました。

私は、学校の課題研究で、食に焦点を当てて紅花の魅力を発信しました。世界農業遺産の認定に向け、(株)銘菓の錦屋との共同開発で、1月に「紅花ゼリー」、夏に「べにばな琥珀糖」を販売しました。

**「食」で紅花の魅力発信  
べにばな琥珀糖などを共同開発**



九里学園高校  
3年 齋藤 千紘 さん

この活動をやるまで、米沢の紅花に馴染みがありませんでした。今後は私たちが情報発信をして、若い人にも紅花の歴史や魅力を知ってもらえたら嬉しいですね。そして、米沢にも紅花という文化があることを認知してほしいと思います。

紅花栽培という農業の分野に関わることや商品開発など、初めての経験ばかりです。実際に自分たちでやってみることで、作り手の気持ちを理解したり、マーケティングの状況を把握したりして、幅広い知識を身につけることができました。

私たちは、紅花を一から栽培して収穫し、その過程を研究したり、紅花の成分分析を行ったりするなどの活動をしています。工学的な知識を活かしながら、商品開発なども視野に入れて、紅花や関連する素材を集めている段階です。

**栽培から収穫を通して紅花を研究  
生産者の気持ちで商品開発**



米沢工業高校専攻科  
石川 翔大 さん(左)  
我妻 尚迪 さん(中央)  
武田 克則 さん(右)

「感動した」と感想をいただき、企画して良かったと思えました。活動から、紅花染めには色・においなど五感で自分の作品に出会える魅力があると発見しました。今後、米沢は世界に誇れるまちだということを知ってほしいです。

(金子さん) 私は1月に、学校の探究活動で、アトイベントを開催しました。イベント内の紅花染め体験では、地元の人にも「初めて体験した」と感想をいただき、企画して良かったと思えました。活動から、紅花染めには色・においなど五感で自分の作品に出会える魅力があると発見しました。今後、米沢は世界に誇れるまちだということを知ってほしいです。

(中川さん) 私は6月に県の魅力を海外に発信するオンラインイベントで、紅花などを紹介しました。授業で紅花染めを体験し、その魅力を知りました。動画でより印象的に伝える工夫をし、海外の人からは「感動した」と感想をいただきました。将来は観光分野に携わりたいと考えており、今後も紅花が生み出す美しい色の文化を発信していきたいです。

**紅花の魅力を世界に発信  
世界的にも貴重な伝統文化と実感**



米沢興譲館高校  
3年 中川 梓 さん(左)  
3年 金子 望愛 さん(右)



イベント動画

# 紅花を栽培する

— 鈴木 彰一さん —

敬師の里未来づくり委員会花と史跡の里づくり部会  
部長。ボランティアエビガサワ代表。紅花栽培農家。



市内山上地区の直江堤公園対岸にある花畑「海老ヶ沢べにはな愛ランド」では、7月になると紅花が満開の花を咲かせます。ここで紅花の栽培を行っている鈴木彰一さんにお話を伺いました。

## 地域を彩る花畑

花が大好きだという鈴木さんは、もと河川整備のため草刈りのボランティアを行っていましたが、この場所に賑わいをもたらそうと、平成21年に小学生と一緒に県花である紅花を植えたことがきっかけで、栽培を始めたといえます。「現在はべにはな愛ランドだけでなく、山形新幹線沿線各所に紅花栽培を拡大しています。地域の人はもちろん、新幹線で通過する人にも紅花の景色を楽しんでいただけるこの場所はとても価値があると感じています」と鈴木さんは話します。

## 紅花への想い

紅花の栽培には大変な労力を要します。広大な畑の草むしりが特に大変だといふ鈴木さん。苦勞が多い中で栽培を続ける原動力は何でしょうか。

「満開期になると、地域の人や学生ボランティアに手伝ってもらって花を摘み、染料用の紅餅に加工して出荷しています。紅花を通して人とのつながりが増えたことが嬉しいですし、何と言っても香りよし、見てよし、食べてよしと魅力が多い紅花が好きなので続けられていますね」

笑顔で話す鈴木さんから、紅花への強い思いが伺えました。

## 世界農業遺産へ

紅花を広く知ってもらうため、鈴木さんは学生などと一緒に様々な活動を展開しています。昨年度と今年度は紅花まつりを開催し、多くの人に紅花を身近に感じてもらうことができたといえます。

今後の意気込みを伺うと「米沢の紅花を世界農業遺産にすることが一番の目標です。また、紅花に興味を持って、栽培する人が増えるように活動を続けていきたいです」と話しました。

世界農業遺産の認定に向けた、今後の鈴木さんの活動にも注目です。



① 学生ボランティアの皆さんに栽培の指導を行う鈴木さん。② 地域の人と一緒に作った紅餅\*。③ 海老ヶ沢べにはな愛ランドに咲く紅花。  
※紅餅… 摘み取った紅花を良く洗って発酵させ、丸めて乾燥させたもの。

# 紅花で染める



— 新田克比古さん —

株式会社新田常務取締役。紅花をはじめとする天然染料の染色を40年以上手掛ける染色家。

■問合せ先／株式会社新田 ☎ 23-7717

## 途絶えかけた紅花の歴史

染めから織りまで一貫生産を行う(株)新田。常務取締役の新田克比古さんは、紅花染めの伝統を守り続けています。紅花染めの歴史やご自身の思いを聞きました。

江戸時代、米沢で栽培された紅花は、紅餅に加工され、京都へと出荷されており、この時代米沢には染色の技術がありませんでした。明治時代以降になると化学染料の輸入が始まり、紅花は衰退してしまいます。さらに、戦時中は食用の作物を栽培することが優先され、換金作物であった紅花は栽培が禁止されていたそうです。「紅花は絶滅する可能性があったんですよ。しかし、紅花を絶やしてはならないと思う人たちが、ごくわずかな種から花を咲かせ、少しずつ種を増やしていきました。そして、三代目である父と母が、紅花染め



の研究をしていた中学校教師の鈴木孝男先生と出会い、試行錯誤の末、紅花染めを米沢織に活かすことに成功したのです」新田さんは、紅花を愛する先人の思いを受け継ぎ、自らが京都で学んだ技法も取り入れながら、紅花染めを守り続けています。

## 自然が生み出す色彩

紅花染めは、何度も染めを繰り返すことで、淡い色から濃い色まで、他にはない色を表現することができます。

「濃い色を染めるには、時間が掛かりますが、気候によっても色が左右されます。大変ですが、それを忘れさせてくれるくらい綺麗で、特に冬の一番寒い時期に染めると良い色が出ますね」と紅花の魅力を語ってくれました。

## 紅花は米沢の宝

新田さんは「まずは市内の人に紅花の歴史や文化を理解してもらい、米沢に素晴らしいものがあるのだと、胸を張ってもらいたいです。そして、米沢全体で花を咲かせ、市外・県外の方を迎えられるようなまちになれば素敵だと思います」と話します。新田さんのような、紅花を愛する人の強い思いが、次世代にも受け継がれていくことでしょう。



① 高校生の探求学習において紅花染めの手順を実演する新田さん。② 紅花染めに使用される紅餅(写真左)と烏梅(写真右)。使用する染料は山形県紅花生産組合連合会の紅餅をメインで使用しているが、自社での紅花の栽培も行っている。③ いくつもの表情を持つ紅の色。紅花で表現できる色は限りがないという。④ 新田さんの父と母が試行錯誤の末に完成させた紅花紬「慕情」(写真右)。

※ 烏梅…梅の実を煙で燻し乾燥させたもの。